

ウータンへようこそ!

「ウータンへようこそ」は、毎回教育界に関わりの深い有識者をお呼びして、全国の学校の先生方の明日へのチカラになるようなお話を伺おうという企画です。今回のインタビューはあなたかも!

好きな大人や憧れの大人を
子どもに見つけさせることが
自ら学ぶ意欲に繋がるんです

子どもの成長うながすキャリア教育も
避難所のスムーズな運営も
学校⇔地域の日々の連携がキモ

長田 徹さん

学校と地域の連携を通じた、
キャリア教育や授業の大切さを各地で語りかける長田徹さん。
震災をきっかけに改めてその重要性が再認識された
学校と地域の“絆”がなぜ学力向上にまで繋がるのか?
連携の大切さや、学校・教師と地域が
上手く連携するコツを、
被災地の学校支援に携わる中川綾さんが
聞き手となり、お話を伺いました。

構成/鈴木健太 写真/柏弘一郎



長田徹さん

文部科学省 地域・学校支援推進室 連携支援 係長
1992年、宮城県石巻市の中学校教諭となり、1995年からは仙台市内の中学校で教鞭をとる(専門は社会科)。2012年4月末日まで仙台市教育委員会の指導主事を務め、学力向上、キャリア教育、学校支援地域本部事業に奔走。現在は文科省で学校・地域連携の推進に取り組み、全国で講演も展開。

避難所運営に見た学校⇔地域の
パートナーシップの大切さ

中川 まずは、長田さんが最近どのような活動をされているのか教えてください。

長田 2011年4月まで、仙台市教育委員会
で指導主事として、学力向上担当、学校と地域
が連携したキャリア教育の普及に力を入れてき
ました。なかなか学校側には理解してもらえず
苦しみましたが(笑)。今も、文部科学省で学
校と地域の連携に携わっています。

中川 ということは、東日本大震災時も、仙台
にいらしたのですか?

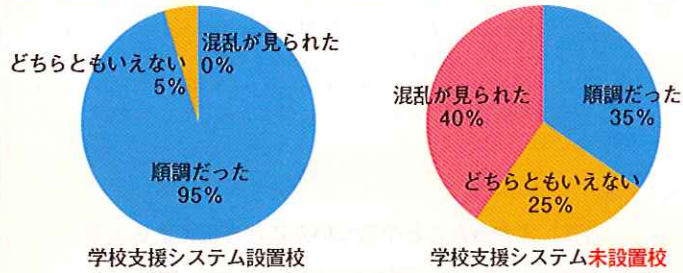
長田 はい。一部の学校で学校支援システム、
つまり学校と地域の定期的で良好な関係が出来
つつある矢先でした。多くの避難所へお手伝い
で回るなか肌で感じたのが、みんなで助け合う
温かい雰囲気、避難所と、どこかギスギスして
居づらい避難所があったということ。後で調べ
てわかったのですが、学校支援システムが設置
されていた学校は自治組織の運営が上手く行
き、未設置の学校では課題が残る傾向にあつた
んです(図1・次頁)。避難者自らが運営する
自治組織では、学校と避難者双方の立場を普段
から理解している住民の存在が大きかった。

中川 避難所運営の差は、日ごろの学校と地域
の関わり方の差でもあったわけですね。

長田 ただ注意してほしいのが、本来この連携
は防災教育ありきでなく、より豊かな教育の創
出のためだということ。学校の内外で子どもた
ちと地域の大人が関わってほしかったんです。

【図1】学校支援システムの設置と災害時の連携

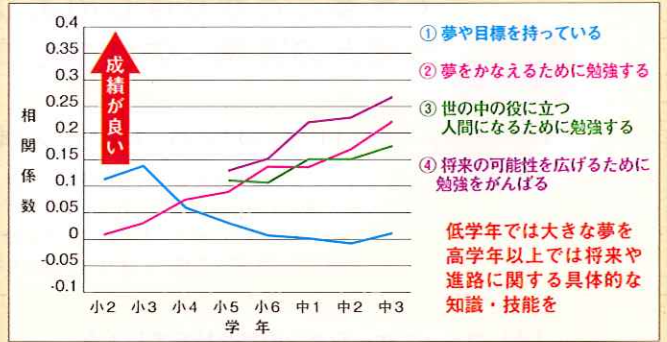
避難所において自治組織が立ち上がる過程は順調だったか。



宮城県内公立学校長聞き取り 学校支援システム設置校20名、未設置校20名 2011年5月26日現在

学校支援システム（学校と地域の良好で定期的な連携）が設置された学校では、避難所で自治組織が立ち上がる過程はスムーズ。「混乱が見られた」はなんと0%。逆に未設置の学校は「混乱が見られた」が40%。地域連携が万が一の災害時にも役立つことが、浮き彫りに。

【図2】将来の目標と成績の関係



小学2～3年では「夢や目標をもっている」という子の方が相対的に成績が良い。しかし、小4を境に、「夢や目標をもっている」子より「夢をかなえるために勉強する」子の成績の方がよくなっている。また高学年から中学生になるに連れ「世の中の役に立つ人間になるため勉強する」「将来の可能性を広げるために勉強をがんばる」という子の成績が右肩上がりに。これは、高学年以降は将来や進路に関する具体的な知識・技能を身につけること＝キャリア教育の有効性を示している。

出典：学習意欲の科学的に関するプロジェクト

なぜ地域と繋がるのが重要か
先生同士で初めに話し合う
ことが大切ですね

学力向上に効果的なキャリア教育は
学校と地域との連携も築く

中川 なぜキャリア教育は重要なのですか？

長田 統計によると、小学校2～3年までは「夢や目標をもっている」子の方が成績はいいのですが、小4あたりから下降する。また、「夢をかなえるために勉強する」子は、小4以降、前者とは逆に成績が伸びている（図2）。「夢をかなえるために勉強する」子は、将来何をやりたいか具体的に想像できている子です。

インタビュー：中川綾さん

株式会社アソビジ代表
一般社団法人プロジェクト結
コンソーシアム理事
中学・高校の保健体育教諭を経て、現在はファシリテーターとして活躍。遊びとビジネスの融合を体現する「アソビジ」の代表を務める。文科省・熟議協働員でもあり、多くの熟議を開催。「プロジェクト結」では被災地・石巻のコミュニティ復興のお手伝いや学校支援に奮闘中。

これはつまり、低学年では大きな夢をもたせ、

細かく言わない方がいい。逆に高学年以上はほんやりとした将来のイメージじゃなく、具体的な知識や技能を身につけさせないと成績が伸びないということです。そこで私は思いました。好きな大人や憧れの大人を子どもに見つけさせることで自ら学習意欲を持ち、学力向上にも繋がると。それがつまりキャリア教育なわけです。中川 仙台では震災をきっかけに学校と地域の連携への理解が増しました。被災地以外で理解してもらうにはどうすればいいですか？

長田 基本的には、連携を大切だと思ってる人が、草の根運動で広がっていくかと思いません。地域、学校、子どもの実態が各地で違うのに、キャンペーンをはったり、法律で制度化してモデルを当てはめても上手くいかない。

仙台でも震災前から学校と地域の連携に積極的だった場所は、防災目的でなく地域全体で子どもを育てるという意識でやっていた。万が一のときでなく、日々の活動の中に成果があることで、さらに両者の連携が深まるんです。



東日本大震災の発災時、避難所では普段から学校に携わる地域の人が大活躍だった。写真内の黄色いジャンパーの人は、普段登下校の安全指導をしているボランティア。「校長先生、何手伝えたいのっさ」と積極的に声をかけてくれた。

できることからはじめよう!! 地域との連携 先生へ5つの提言



【1】地域の人とパートナーシップを築きましょう

学校との協働を考えてくれる地域の方々は、学校の助けになればと勇気を振り絞り校門を叩きます。ですから、丁寧に対応しつつもお客様扱いせず、ともに子どもを育てる責任を持った関係者として対等な立場で、よりよい関係を築きましょう。

【4】コミュニケーションの場を持ちましょう

地域のみなさんとのコミュニケーションの場をつくり、一緒にお茶を飲んだりしてたくさん話をしましょう。お互いの思いが伝わり、スムーズな活動に繋がります。信頼感が生まれることで、活動にも広がりや深まりができます。

【5】子どもと一緒に地域のみなさんから学びましょう

地域のみなさんは、人生において培った多くの知識や体験を持っています。先生たちも、子どもと一緒に地域のみなさんから学びましょう。きっと、先生方の財産となるはず。地域のみなさんも先生や子どもと一緒に学んでいるのです。

【2】笑顔で明るいあいさつをしましょう

地域の人にとって、職員室は気軽に出入りしづらいところ。そして、先生たちの視線を冷たく感じてしまうときも……。そんなとき、笑顔で明るくあいさつすれば心がほぐれるもの。地域のみなさんからも、あいさつが返ってくるはず!

【3】よかったことや気づいたことを伝えましょう

地域のみなさんは、活動の中で自分自身も学び、向上したいと考えています。活動後は今後に生かせるような感想を聞きたくがっています。求めに応じて、よかったことや気づいたこと、工夫して欲しいことなどを伝えましょう。



学校のことはすべて教員が、でなく
ときには地域に頼ってもいい

中川 具体的にどんな成果がありましたか?

長田 例えば最初は学校の花壇の手伝いなど簡易なことから地域の人に手伝ってもらい、次段階として道德の授業などで教育課程の中に入ってきてもらう。そのとき教師は地域の人を「〇〇先生です」と紹介するわけですね。そうすると地域の人と子どもが名前を覚え合い、町で会っても名前呼び、挨拶しあえる関係になれる。少しずつのステップアップが大切です。

中川 真面目な方が多い先生たちは、学校のことはすべて自分がやるべきだと思いがち。でも、私たち社団法人やNPOなどもっと外部を使ってもらっていいんです。地域やNPOが「そういう雑務は無理して先生がやらなくてもいいですよ」と言ってくれてもいいです。

長田 その通りです。実は僕も教師時代、自分のクラスのことは何でも自分でやりたがりでした。教師生活10年目ごろ、不登校の女の子を受け持ったとき、努力したのですが上手く接することができなかつた。提出物も、僕ではなく養護の先生に渡したり。ところがある日、その保健室にイケメンの大学生ボランティアが来たんです。その運命的の出会いから(笑)、その女の子は学校にきはじめ、笑顔も見せるように!これは直接指導じゃなくても上手くいく場合もあるな、と思うきっかけになりました。

中川 ただ、教師たちの現実には忙し過ぎて、地域連携への一歩目を踏み出すのが難しい。



トークショーはスライドを交えた長田さんの講演からスタート。東日本大震災直後、現場で見たこと、感じたことをド直球で伝える語り口に、参加者はグイグイ引き込まれます。第二部の対談では、ともに被災地の学校の状況に詳しいお二人が熱いクロストークを展開! ここには載せきれなかった被災地の現状など、参考になることばかりでした。

長田 夏休みを利用して、地域訪問からはじめてみてはいかがでしょうか。まずは町内会長など顔役を訪ね「最近この辺の子どものはどうですか?」と訪ねてみるとか。また、公民館や市民センターなど社会教育施設を訪ねるのも手です。彼らは地域の大人に詳しいですから。
中川 私は「なぜ地域と繋がるのが重要か」先生同士でまず話し合うことが必要だと思えます。そうすれば積極的に地域と交わるはず。
長田 「この学校にいる3年間で地域との連携を完成させなきゃ!」と焦る必要はありません。方法(HOW)は地域や状況によって違うため異動先で活用できないこともあります。地域連携とは何か(WHAT)、なぜ必要か(WHY)の答えは教師生活にずっと役立ちますから。出来ることから一歩一歩進めてください。

※このインタビューは、5月26日に収録しました。